

「何でもない今日」

木村圭一

登場人物

川嶋美波	(24)	劇団員
後藤健人	(24)	劇団員
小田武	(24)	劇団員
佐藤祥子	(23)	劇団員
齊藤賢治	(32)	社員
宮本志穂	(29)	齊藤の彼女
神田正恭	(32)	齊藤の友人
橋本次郎	(40)	探偵
宮崎恵美	(31)	夫に浮気された女
本田奈緒子	(25)	無職
本田佳菜子	(23)	奈緒子の妹
堂島正道	(41)	ゴロツキ
近藤雄介	(26)	堂島の部下
宮崎仁	(36)	恵美の夫
井上沙知	(29)	宮崎の浮気相手
佐久間	(35)	レストランスタッフ
宮脇	(23)	レストランスタッフ

○下北沢の街並み

下北沢の駅前の通りを歩く人々。

古着屋や飲食店が立ち並ぶ商店街。

その中にある小さなビル。

そのビルに入っていく川嶋美波（2

4）。

○稽古場

ビルの一室の扉を開け稽古場に入る美

波。

美波「あれ、早いね」

片手に台本、片手に小道具の拳銃を持

ち、一人立ち稽古をする後藤健人（2

4）。

後藤「おはよう。いや、なかなか台本覚えら

れなくてさ」

ブツブツと台本を見ながら台詞を言い、

拳銃を壁に向けている。

周りには舞台に使う小道具やら衣装や

らがたくさん置いてある。

時計は13時を指している。

美波、イスに座り携帯電話を操作しつつ後藤を見る。

美波「なんかさ：顔が怖くないんだよな。良い人そうっていうか」

後藤「えっ？何」

美波「目つきが鋭い方が良いつていうか」

後藤、美波の方を向き拳銃を向ける。  
鋭い目つきで、

後藤「動くな！」

と声を張り上げる。

美波「動いてないよ」

後藤「：いや、今の台詞だから。大体わかるでしょ」

後藤、台本を一瞥した後

後藤「ゆっくりと床に這いつくばれ」

美波「あと声も、もう少し低い方が良い気がする」

鋭い目つきをやめ、普段の表情に戻る。  
後藤「えーまだ練習中なんだからそんなに言

わないでよ」

美波「そうなんだけど」

後藤「それに、こういう状況になったことないし、拳銃撃つような状況」

美波「それ言い出したら何にも出来ないですよ。それか撃たれる役にしてもらうか」

後藤「撃たれたこともないんだよ」

拳銃と台本をテーブルの上に置き、イスに座り美波と向かい合う。

後藤「そう言えばさ、誕生日プレゼントは用意できたの？」

美波「あーそれ小田くんに頼んだ。朝さ、テレビで占い見てたの。そしたら私最下位だったの。今日はツイてないかもしれない」

後藤「占いとかそういうの気にするんだ」

美波「気にするでしょ。見たんだから」

後藤「じゃあ見なきゃいいじゃん」

美波「もう遅いよ見たんだから。でもさ、あれってランキング形式で発表されるでしょ。当然みんな同時に1位にならないじゃん」

後藤「そりやそうでしょ」

美波「みんなに同時に良いことは起こらないんだなって。世の中って不公平だなって」

後藤「それ自分が最下位だったから言ってるでしょ。もしみんなが1位になったら、誰も1位じゃないのと同じだろ。それより、今日祥子ちゃんにサプライズするんだからさ、その暗い気分引っ張らないですよ」

美波「わかってるよ。最下位だけど」

楽屋の扉が開く。

小田武（24）が入ってくる。

小田「おはよう」

美波「おはよう」

小田「午前中にさ、レストランに行っ  
てプレゼント預けて来たから」

美波「本当！ありがとう」

小田も並んでイスに座る。

後藤「じゃあ、3人揃ったから今日の段取り、もう1回確認しておかない」

美波「そうしようか。まず、みんなでレスト

ランに行きます。祥子にはサプライズのことは内緒。表向きは、この前の公演の打ち上げだから」

後藤と小田、頷きながら話を聞く。

美波「ご飯食べてる途中でタイミングを見てレストランに予約した誕生日ケーキを出します。ケーキを食べた後、誕生日プレゼントを渡します。これで良いよね？」

小田「誕生日プレゼントは、予約した席の下に隠して置いてもらってあるから」

後藤「うん問題ないでしょ。ケーキはお店が作ってくれてるし。そういえば誕生日プレゼント何にしたの？」

美波「それは内緒。念のため祥子に時間だけ連絡しとく」

携帯電話を操作し始める美波。

○自宅マンション

斉藤賢治（32）の自宅マンション。  
整理整頓されたリビング。

テーブルを挟んで、神田正恭（32）

が缶コーヒーを飲んでいる。

神田「そう言えば、相談って何？」

斉藤「俺さ…今日さ…今日」

神田「うん」

斉藤「…今日」

神田「早く言えよ」

斉藤「プロポーズしようと思ってさ」

神田「えっ！ついに。志穂ちゃんに。へえー。

あと俺、志穂ちゃんじゃないから、そんなに躊躇わなくて良いんだけど」

斉藤「指輪も買ったんだよ」

ポケットから指輪ケース取り出し、見せる。

神田「やっとき、お金貯めて買ったんだよ。

そんなに高くないんだけどさ」

神田「付き合って何年だっけ？」

斉藤「もう、5年になる。不安なんだよな、

喜んでくれるかなって」

神田「大丈夫じゃないの？言うチャンスなん

ていくらでもあるんだし」

斉藤「今日なんだよ。5年前の今日付き合い  
始めたから。験担ぎでさ」

神田「よく覚えてるな」

斉藤「でも俺さ、昔から大事な場面って緊張  
するじゃん。よく繊細って言われるし」

神田「確かに、昔からそうだよ。クラスの  
自己紹介の時、やたら声が小さかったり、  
テストの当日お腹痛くなったりしてたよな。  
あと、徒競走のスタートの時のピストルの  
音にビビったり」

遠くを見ながらしゃべる神田。

斉藤「あんまり昔のこと思い出させないで。  
だから、なん良い方法ないかなって？」

部屋の隅にあった、ジェンガを持って  
くる。

神田「じゃあ試しにさ、今から本番だと思っ  
てやってこれみてよ」

斉藤「告白本番のとき、ジェンガ使わないだ  
ろ」

ジェンガをケースから出し、テーブルの上に置く。

神田「こういうのはイメージが大事だから。こうしよう」

神田、ジェンガの1番上に結婚指輪のケースを乗せる。

斉藤「いやいや、指輪はダメだって」

神田「いいから。これ位やらないと緊張感出ない。これでやって上手くいけば告白も上手くいく」

斉藤、深呼吸をして、ゆっくりとピースを1つを引き抜こうとする。

手が震える。  
ためらうも、もう1度引き抜こうとするも、崩れる。

斉藤「あっ！」

崩れたピース。束の間の沈黙。

斉藤「これ失敗する予兆じゃないよね」

神田「大丈夫、気にしない。本番の時ジェンガ使わないから。上手くいけば今日は記念

日になるんだから」

笑ってごまかす神田。

○探偵事務所

探偵事務所の一室。

テーブルの上には書類と男と女が腕を組んでホテルに入る写真が並べられている。

ソファーに座る橋本次郎（40）と柴

田恵美（31）。

写真を手取り見つめる恵美。

橋本「これは、3日前の夜の様子です。場所は駅前のグランドホテルです」

怖い顔をしてじっと写真を見つめる恵美。

橋本「この後、ホテルに入った後何をしていたかまでは分かりません」

恵美「聞きたくありません。これもう完全な浮気ですよね」

橋本「この写真だけでは浮気と断定できるか

どうか。もしこの写真をご主人に見せたとしても何かしらの言い訳はできません」

恵美「何言ってるんですか。完全なクロですよクロ。もう、こんなやつ。怪しいと思っ  
たんですよ最近の行動、携帯電話だって絶対に離さずに持ってたし」

写真の夫を人差し指で何度も押し潰す。

橋本「落ち着いてください。あれ持ってきて、あれ」

近くにいた女性に声をかける。

橋本「調査はどうされますか、このまま続けますか？それか、一度ご主人と話されてはいかがでしょうか？」

恵美「話す？話すことなんてないわよ。私が一方的に問い詰めるだけでしょ」

女性「どうぞ」

恵美の目の前に水が置かれる。

橋本「頭に血が上ったときには、冷たい水をゴクゴクと飲むのが有効です」

恵美「血なんて上ってません」

橋本「だんだん早口になってます。水を飲むと、気持ちを落ち着かせるだけでなく、冷たいという刺激で気分が変わって、冷静さを取り戻せることが多いんです」

橋本、ゆっくりと丁寧に説明する。

仕方なく、一気に水を飲む恵美。

橋本「興奮した状態から、いつも通りの状態に戻ることを頭を冷やすって言いますね」

飲み干したグラスを力強くテーブルに置く。

恵美「そんな豆知識はどうでも良いんです」

橋本「そしたら、落ち着いた上で話を聞いてください」

恵美「私はさっきから、さらにその上から言ってるんです」

橋本「どういう事ですか？とにかく」

恵美「（橋本の言葉を遮り）なんか、やり返す方法ないんですか。なんか懲らしめる方法、何かあるでしょ何か！」

険しい表情の恵美。

橋本「探偵は復讐屋ではありませんので。それに、度を越えた仕返しは不法行為になることもあります」

恵美「不法行為？ 例えば？」

橋本「例えば：不倫相手と話をしている場で、相手にコップの水を浴びせる、平手打ちにする、相手を罵倒するといった行為です。場合によっては名誉毀損や暴行罪として訴えられる可能性があります。だからこそ一度、気持ちを落ち着かせてください」

険しい顔の探偵。

恵美「分かりました。でも、自分だけ傷つくのって不公平じゃないですか？」

橋本「そうですね。でも世の中は常に不公平ですよ。復讐に時間とお金をかけるぐらいなら、そのお金で美味しいものでも食べた方がより有益です」

恵美「そうですね。わかりました」

恵美「夫の今日の予定わかりますか？」

橋本「ええ、まあ」

手帳を取り出し見る橋本。

恵美「確かに世の中は不公平です。だからこそ“善は急げ”です」

恵美の顔を凝視する橋本。

橋本「あなたが今考えていることが善だと良いんですが？」

○マンションの一室

カーテンが閉められたままの薄暗い部屋。

昨日の晩御飯の食器がそのままなっている。

時計は午後5時を指している。  
処方された睡眠薬の袋。

ベッドで寝ている本田奈緒子（25）。  
家の扉を開け帰ってくる妹の本田佳菜子。（23）

佳菜子「ただいま」

リビングの扉を開ける。ベッドを見る。

佳菜子「お姉ちゃん、まだ寝ているの？」

荷物を置き、カーテンを開ける。光が差し込む。

佳菜子「もう夕方だよ」

奈緒子「起きてるよ」

奈緒子、ゆっくりと体を起こす。

佳菜子「ちゃんとご飯食べた？私また出掛けないと行けないから」

奈緒子「お腹空いてない、体の調子もいいしテーブルの上の睡眠薬に目をやる。

クローゼットから服を選ぶ佳菜子。

佳菜子「ねえ、どっちがいいと思う？これから友達女子会やるの？」

奈緒子「どっちも似合ってるよ」

佳菜子「そうかな」

鏡に自分の姿を映す佳菜子。

それを虚ろな目で見る奈緒子。

奈緒子「（佳菜子に聞こえない声で）これが普通だよな」

佳菜子「何か言った？」

奈緒子「何でもない。私ちゃんと就職できた

「ここ出るから」

少し驚いた表情で振り返る佳菜子。

奈緒子「もう少しだけ待って」

佳菜子「大丈夫、焦らなくていいよ」

奈緒子「今日は美味しいもの食べるの？」

佳菜子「そうだよ。イタリアンの美味しいお店」

奈緒子「そう・・・昔さ、家族で旅行行った時あったでしょ」

佳菜子「あー小学校の頃でしょ」

奈緒子「地元で有名な蕎麦屋に行った覚えてる？」

佳菜子「んー。そうだった？」

奈緒子「もちろん、みんな蕎麦を食べると思うでしょ？でも、私はカレーが食べたいって言ったの。で、その時お父さんはカレーじゃなくて蕎麦にしなさいって言ったの。私は嫌だって言ったけど、結局蕎麦を注文することになったの」

佳菜子「私、全然覚えてない」

奈緒子「時々思うんだよね。あの時カレーを食べていたらどんな味がしたのかなって」  
佳菜子「・・・まあでも、カレーなんていつでも食べられるんだし」

奈緒子「そうだよ。でも最後は美味しいもの食べたいよね」

佳菜子「最後って？」

奈緒子「ううん、何でもない」

着替え終わる佳菜子。

佳菜子「じゃあ私行ってくる」

奈緒子「楽しんでね」

ぎこちなく笑う奈緒子。

○同・マンションの一室

綺麗に片付けられた部屋。

奈緒子、部屋の隅にある箱を開ける。

今まで処方されていた大量の睡眠薬。

その睡眠薬をバッグに詰める。

引き出しを開けて、底に隠した白い封筒を取り出す。

○ビルの一室

錆びれたビルの外観。

薄暗い部屋にブラインドから薄い光が差し込む。

テーブルとソファしかない簡素な室内。テーブルの上には缶ビールの空き缶が散らかる。

ソファーに座る堂島正道（41）と

近藤雄介（26）。

堂島「きつちり数えたんだろいな」

近藤「はい、間違いありません」

近藤、バッグを開けて封筒を取り出す。中身の札束を取り出す。堂島に見せる。

堂島「いいか、今日の取引さえ上手くいけばいい。失敗は許されない」

近藤「はい」

堂島「取引場所には俺1人で行く。何かあったら連絡するから待機しておけ」

近藤「はい。相手からは、いつ連絡があるんですか？」

堂島「もうすぐ来るはずだ。連絡が来て時間と場所を指定される。いつも非通知だからこちらから連絡できない。面倒な相手だ」

近藤「そうですね。やっぱり、堂島さんはこういう取引には何回もやられてきたんですか？」

堂島「当たり前だ。俺は今まで、こういう取引を何度も経験してきた。修羅場をくぐり抜けてきた」

近藤「修羅場！どんな感じだったんですか？」

堂島「あの時もな、取引には、俺一人だった。相手は4、5人はいた。あいつら約束の金額より倍の金額をふっかけてきたんだ。それでも俺は一切舐められずに無事取引を成立させた」

近藤「おー」

堂島「近藤、俺が取引の時、何を考えているか分かるか？」

近藤「いいえ。何を考えているんですか？」

堂島「いつも冷静に、何が起きても動じない」

近藤「いつも冷静に、何が起きても動じない」  
真似て繰り返す近藤。

堂島「そうだ覚えておけ。いつも冷静に、何が起きても動じない」

近藤「わかりました」

堂島「もし、今日俺から連絡することがあっても落ち着いて対応しろ」

近藤「わかりました」

堂島「何があっても舐められるな事はするな。俺はな：」

堂島の携帯電話に着信がある。

非通知設定の表示だが、すぐに出る。

堂島「堂島だ。問題なく、受け渡しの現金は用意できている」

堂島、何度か頷いた後に電話を切る。

緊張した表情の近藤。

近藤「相手は何と？」

堂島「取引の時間と場所が決まった。時間は19時。場所は：」

○レストラン（夕方）

洒落た外観のレストラン。

レストランの入り口の看板には「今日  
という日の思い出に」と書かれている。

慌ただしくホールスタッフの佐久間

（35）と宮脇（23）が開店準備を  
している。

佐久間「今日は忙しくなるから。特にサプラ  
イズの誕生日ケーキは細心の注意払って。」

お客さんにとっては大事な1日になる」

宮脇「僕最近入ったばかりなので迷惑かける  
かもしれませんがお願いします」

佐久間「しっかりしろよ。落ち着いてやれば  
問題ない」

宮脇「わかりました。それもサプライズのプ  
レゼントですか？」

荷物を指差す宮脇。

1つは綺麗に包装された箱、もう1つ  
はアタッシュケース。

佐久間「そうだ、お客さんから預かった大事

な物。これは俺が運んでおくから」

宮脇「大丈夫です。これぐらい僕やりますから」

箱とケースを手に持つ。

佐久間「そうか：そしたら、これは6番席。

こっちは9番席のテーブル下に隠しておいてくれ」

宮脇「わかりました」

テーブルに歩いて行く宮脇。

○レストラン（夜）

扉にかけてある「CLOSE」の看板が外され扉が開く。

豪華な天井の照明、洗練された店内。

綺麗に並べられたナイフやフォーク。

次々と店内に客が入って行く。

美波「予約した川嶋です」

楽しげに入る美波、後藤、小田、佐藤

祥子（23）の4人。

その後に、斉藤と宮本志穂（29）。

さらにその後ろ、時計を気にしながら  
無表情で歩く堂島。

○レストラン店内

賑やかな店内。楽しい会話をする客。  
料理を運ぶホールスタッフ。

○劇団員のテーブル

グラスを手に持つ美波、祥子、後藤、  
小田の4人。

後藤「いい？みんないい？それでは乾杯〜」

グラスとグラスがぶつかり合う。

それぞれが飲み始める。

美波「公演、お疲れ様でした」

後藤「お疲れ〜」

祥子「いや〜本当、公演うまく行って良かったよね。お客さんもいっぱい入ってたし」

小田「俺、結構頑張ったんだよね」

美波「どこがよ！何箇所かセリフ飛ばしたで  
しょ」

後藤「怖い顔しない、怖い顔。今日はいっぱい飲もう」

みんな笑う。

○斉藤のテーブル

テーブルには美味しそうな料理が並ぶ。

斉藤「この肉の料理美味しい？」

志穂「うんこれ美味しい。なんていう名前かわからないけど」

斉藤「良かった。たまにはこういうところでご飯食べるのも良いかなって」

志穂「そうだよね。2人だけでこういうレストラン来るの久しぶりだもんね」

斉藤「うん：美味しい」

斉藤、ポケットに指輪が入っていることを手で確認する。

○堂島のテーブル

料理を食べつつ、腕時計を見る堂島。

19時を過ぎている。

携帯電話の着信音が鳴る。電話に出る。

堂島「堂島だ。予定通り予約されていた席に着いている」

無表情のまま何度か頷く。

堂島「下？分かった。それとこちらが用意した物はどうすればいい？あー、分かった」

電話を切る。

テーブルクロスをめくりテーブルの下を覗く。

○恵美のテーブル

眼鏡をかけ、カツラを被り変装している恵美。

恵美、サラダを雑に口に入れつつ、夫の宮崎仁（36）と井上沙知（29）が座るテーブルの方を何度も見る。

2人は楽しそうに話しているが、会話の内容までは聞こえない。

恵美「楽しそうにしやがって」

携帯電話を取り出し、周りを気にしながら慎重に写真を撮る。

次々に料理を口の中に入れ、噛み締めめる。

恵美「料理は美味しい」

○奈緒子のテーブル

近くのテーブルからは賑やかな笑い声が聞こえてくる。

ドレスのようなキレイな衣裳に身を包む奈緒子。

一人で黙々と料理を食べる。窓から外を眺めると奈緒子の哀しげな表情が映る。

○堂島のテーブル

堂島の携帯電話が鳴る。

すぐに画面を見るが表示の名前は近藤。渋い表情。

堂島「何だ」

近藤M「取引は上手くいきましたか？」

堂島「いや、まだだ。面倒なことになった」

近藤M「何か問題ですか？」

堂島「受け渡しの物はあったんだが・・・」

テーブルの上に置いたクマのぬいぐるみを凝視する堂島。

堂島「いや、また連絡する」

近藤M「わかってます。堂島さんが今何を考えているか。いつでも冷静に何があっても動じない」

堂島「当たり前だ」

電話を切る。

困惑の表情の後、クマのぬいぐるみのお腹やら背中やらを慎重に探るように触る。

○斉藤のテーブル

楽しそうに食事続ける斉藤と志穂。

ふと、自分の手を見つめる斉藤。手が震えていない事を確認する。

○堂島のテーブル

腕組みをしてテーブルの上に置いたク  
マのぬいぐるみを見ている堂島。  
周りにいる客を見渡す。  
恵美と恵美が持つ大きバッグを見る。

○恵美のテーブル

怖い顔をして料理を食べる恵美。

恵美のテーブルの前に来る堂島。

堂島「すみません。ちよつとよろしいです

か？今私の荷物がなくなりまして」

恵美「はあ？」

堂島「探しているのですが、バッグの中身を

見せて頂いてもよろしいですか？」

恵美「何でバッグの中身あなたに見せなきゃ

いけないのよ！」

堂島「もしかしたら、私の荷物と入れ違いで

はないかと思ひまして」

恵美「私が盗んだとでも言いたいわけ。そん

なわけないでしょ！大体入れ違いってこれ

と同じバッグ持つてるわけ？」

堂島「そうわけではないのですが。見せてもらえれば納得します」

恵美「（大きな声で）大体、何が入ってるわけ？」

とっさに、宮崎のテーブルを見る。

口の前に人差し指を立て、静かにしてのジェスチャー。

恵美「（小声で）大きな声は出さないでもらっていいですか？」

堂島「私は大きな声は出していません。中身は：ちよつと人には言えないものです」

恵美「人に言えない物って何よ？」

堂島「それはですね…」

恵美、いやいやバッグの中身を見せる。

恵美「ほら、別にあんた物じゃないわよ」

バッグの中には、着替えや変装グッズやらが入っている。

怪訝な表情の堂島。

堂島「確かに私のものではありません、失礼しました」

○奈緒子のテーブル

恵美のテーブルから離れる堂島を見る

奈緒子。

イスの上に置いた自分のバッグを見る。  
バッグを持って席を立つ。

○女子トイレ

奈緒子、バッグを持ってトイレに入る。  
うろろしてあたりを見回す。

洗面台付近のゴミ箱に近づく。  
バッグの中から大量の睡眠薬と封筒を  
取り出しゴミ箱に捨てる。

○劇団員のテーブル

会話に盛り上がる4人。

お酒が入り4人とも少しだけ酔って  
いる。

小田「本当に、そういう奴がいたんだって」

祥子「嘘だゝそんなわけないじゃん」

美波「（後藤に小声で）じゃあ、そろそろス

タッフさんに頼んであれ持って来てもらって」

後藤「わかった」

頷いて、すっと席を立つ後藤。

○女子トイレ

トイレの洗面台の前に立つ恵美。

イライラしながら手を洗う。

恵美「何よさっきの男、気分悪い」

手を拭いたティッシュをゴミ箱に勢よく投げ捨てる。

何気なくゴミ箱の中を見る。

ふと、中に入っている物がが気になり手に取って見る。

捨てられているのは睡眠薬のケースと白い封筒。封筒には“遺書”と書かれている。

少し考えた後、睡眠薬と遺書をポケットに入れる恵美。

○劇団員のテーブル

美波「それでは、今日は祥子に渡す物があります！どうぞ！」

後藤、ろうそくに火がついたバースデーケーキを持って登場する。

美波「誕生日おめでとう」

拍手をする美波、後藤、小田。

嬉しそうな表情の祥子。

祥子「えっウソ！本当に！ありがとう」

美波「サプライズで用意してたの、みんなで驚かそうと思って」

祥子「全然気づかなかった！」

目の前に置かれたろうそくの火を吹き消す祥子。

拍手をする美波、後藤、小田。

美波「じゃあ、みんなで食べよう」

○宮崎のテーブル

沙知が席を立ち、トイレに向かう。

宮崎の携帯電話が鳴る。画面表示を見

ると「恵美」と表示されている。

渋い顔をしてレストランの外に歩く。

恵美「もしもし、今どこ？」

話しながら、トイレに行くふりをして  
テーブルの前を通る恵美。

恵美「帰って来る前にさ、買って来て欲しい  
ものがあって」

宮崎のイスの前で一瞬立ち止まる。  
イスの上に黒く塗った押しピンをさり  
げなく置く。

恵美「牛乳、牛乳切らしちゃって」  
無表情でテーブルを通り過ぎる。

すれ違い様にトイレから戻ってくる沙  
知。

携帯電話を握りしめテーブルに戻って  
くる宮崎。

沙知「電話、大丈夫？急用とか？」

宮崎「問題ない。仕事の電話だよ。みんな俺  
を頼り過ぎなんだよな」  
と立ったまま答える。

○斉藤のテーブル

楽しく食事をしている斉藤と志穂。

ポケットから結婚指輪のケースを取り

出しヒザの上に置く。

斉藤「志穂。前から言おうと思ってたんだけど…」

ど…」

少し間をおいて、ずっと深呼吸する。

宮崎M「痛っ」

店内に響き渡る宮崎の声。

○宮崎のテーブル

尻を抑え、悶える宮崎。慌てる沙知。

沙知「えっ、何？どうしたの？大丈夫？」

宮崎「いや、ケツが、痛っ…」

慌てて近づくホールスタッフの宮脇。

宮脇「お客様、どうかなさいましたか？」

宮崎「いや、大丈夫です。何でもありません」

と、手で尻を抑えながら言う宮崎。

宮崎「ちょ、ちよっとうるさかったですね。

すみません静かにしますので」

お尻に刺さった押しピンを手取る。

宮崎「誰だよこんなイタズラ！」

辺りを見回す宮崎。

○劇団員のテーブル

切り分けた誕生日ケーキを食べる4人。

祥子「本当、美味しい」

美波「良かった」

後藤「何？さっきの叫び声？」

小田「何でもいいじゃん」

フォークを置き、パンと手を叩く美波。

美波「実は、ケーキだけじゃなくてプレゼント

ともあります！」

祥子「本当に？」

美波「じゃあ、後藤くんプレゼント出して」

後藤、テーブルの下からアタッシュケ

ースを取り出す。

小田「あれ？アタッシュケース？それじゃな

いけど」

祥子にケースを渡す後藤。

後藤「えっ？下にはこれしか置いてなかったけど」

美波「ちゃんとプレゼント用に包装もお願いしてたのに」

祥子「そしたら一回、開けてみるね」

ゆっくりとアタッシュケースを開ける

祥子。

怪訝な表情をしながらケースの中身を目の前に出す。

手に持っているのは拳銃。

○堂島のテーブル

イライラして貧乏ゆすりをしている堂

島。着信がある。急いで携帯電話を取りだす。表示画面には、近藤の名前。

堂島「俺だ。：いやまだだ。問題が起きた。

もしもの時の為に待機してくれ。わかっている。俺はいつでも冷静だ」

素早く電話を切る。

○劇団員のテーブル

祥子から拳銃を受け取り触る後藤。

後藤「何で小道具があるんだよ。誰か持って来た？」

小田「俺は持って来てないよ」

美波「私も知らない。もしかして祥子を驚かそうと持って来たんじゃないの？サプライズで」

後藤「違うと思うけど」

美波「それより、私が買った来たプレゼントはどこ？」

美波、テーブルの下にプレゼントがな  
いかよく探す。

後藤「小道具の銃ってさ、こんなに重たかったっけ」

何気なく銃を撃つ振りをする後藤。

○堂島のテーブル

堂島、銃で遊ぶ後藤に気づく。

席を立ち、足早に劇団員のテーブルに

向かう。

○劇団員のテーブル

テーブルの前に来る堂島。

堂島「おい、それどこにあった？」

後藤「えっ？これは」

堂島「どこにあったって聞いてるだろうが」

険しい顔で少し声を荒げる。

後藤「テ、テーブルの下に：」

堂島「そうか。これは俺が受け取る予定の物

だ。渡せ」

後藤の前に片手を出す。

堂島「いいか、今手に持っているものを大人しく渡してくれるだけでいい」

後藤、緊張で動けない。

堂島「早く今持っているそれをケースに入れて渡せ」

後藤、ケースに入れようとするも手が

動けない後藤。

堂島が強引に後藤の手から銃を奪いと

ろうとする。

思わず抵抗する後藤と、それを押さえつけようとする堂島。

○斉藤のテーブル

斉藤のヒザの上の結婚指輪。

志穂「うん、デザートも美味しかったね」

ワインを飲みつつ、笑顔の志穂。

斉藤「志穂、前から言おうと思ってたんだけど…」

バンと銃声がレストラン中に響き渡る。

思わず身を低くする斉藤。

レストラン中の客、スタッフが驚き、静まり返る。

○劇団員のテーブル

発砲に驚き、動けない堂島。

同じく動けない劇団員。

周りの客が、堂島と銃を見て騒ぎ始める。

慌てて駆けつけるスタッフ。

宮脇「お客様、大きな音は他のお客様のご迷惑になりますので…」

と冷静に言うが、銃を見て固まる。

後藤「えっ？あつ、はい。すみません」

周りの客が拳銃を見て騒ぎ始める。

席を立ち上がり、どうするべきか迷っている。

堂島、後藤の手から銃を奪う。

堂島「クソが！手間かけさせるな」

堂島、銃を上に向け天井に発砲する。

堂島「全員、その場から動くな。床に伏せる」  
声を荒げる堂島。

それぞれの客が顔を見合わせて口々に騒ぎ出す。

宮崎「みなさんここは、言う通りにしまし  
う。（沙知に向かって）大丈夫だから」

恵美「（小声で）なんか腹立つ」

斉藤「志穂、ここは大人しくしよう」  
ゆっくりと床に伏せる客たち。

堂島、警戒しながら客全員の動きを観察する。

堂島「いいか、何もしなければ撃たない。逃げるだけだ。俺が逃げるまで何もするな」

銃口を周りに向けながら言う。

堂島「警察には連絡するな。俺が逃げるまで

…女だ、女を1人連れて行く」

店内を見渡す堂島。

奈緒子が立ち上がる。

堂島、奈緒子に銃を向ける。

奈緒子「私で良いですか？」

堂島「あ？」

奈緒子「撃たれるのは私で良いですか？」

堂島「抵抗しなければ撃たない」

奈緒子「撃ってください。大丈夫です」

堂島「大丈夫なわけないだろ。痛いじゃ済まないんだ」

奈緒子「死ぬ覚悟ならできます」

堂島「できてるわけねえだろうが」

奈緒子「できてます。私は早く楽になりたい

んです。消えてしまいたいんです」

震える声で涙ぐむ奈緒子。

それを見る恵美の顔。

堂島「消えてしまいたいのは俺の方なんだ。

早くここからな」

堂島、今度は志穂に銃口を向ける。

堂島「その女、お前でも良い」

すつと立ち上がる斉藤。

斉藤「あ、あの、代わりに自分が行きます」

堂島「はあ？お前男だろ」

斉藤「彼女の：代わりに行きます」

堂島「彼女？彼女の身代わりか。最後に何か

言っておくか？」

斉藤「言いたいことはあるんですが：」

そつと志穂の顔を見る。

斉藤「さすがに、今じゃないと思うので：や

めておきます」

恵美、携帯電話を取り出し、操作する。

テーブルに置いた宮崎の携帯電話が鳴る。

とつさに堂島が宮崎のテーブルに銃口を向ける。

恵美、堂島に気づかれぬように体を起こす。

宮崎「あつ、すいません私の携帯です」

堂島「出るな」

宮崎「はい」

画面表示には恵美の名前。

堂島、祥子に向き直り、

堂島「おい、そのケースを渡せ」

恵美、立ち上がり堂島に近づく。

恵美に銃口を向ける堂島。

恵美「何がしたいのか分かりませんが、落ちて着いてください」

堂島「さっきの女か：お前が一緒に行くか」

恵美「あの：これ、水どうぞ」

手に持っていた水が入ったグラスをテーブルに置く。

恵美「水を飲むと、落ち着いて冷静になれる  
そうです」

堂島「いいか、俺はいつでも冷静だ」

恵美「一回落ち着きましたよ。一回。水を飲んで」

祥子に銃口を向ける堂島。

堂島「早くケースを渡せ」

急いでアタッシュケースを閉じる祥子。

堂島、興奮しつつもゆっくりとグラスを手に取り水を飲む。

祥子、ケースを堂島に渡す。

堂島、ケースを受け取るもゆっくりとヒザから崩れて床に寝転がる。

呆然と堂島を見る劇団員と恵美。

恵美「えっ？もう？」

恵美、寝転がった堂島の体を揺すが、微動だにしない堂島。

恵美「け、警察に連絡！」

叫ぶ恵美。騒ぎ出す店内の客。

緊張が解け、表情が緩む劇団員。

恵美に近づく宮崎。

宮崎「すごいですね。勇氣ありますね」

恵美「そうですか」

眼鏡とカツラを取る恵美。

驚きの表情の宮崎。

宮崎「えっ！恵美」

宮崎の首につかみかかる恵美。

恵美「あんたがここに来なきゃ、巻き込まれずに済んだのよ」

○レストランの外観（夜）

すっかり夜になっている。

○レストラン内

客が帰って静まり返る店内。

宮脇「とんだ1日じゃん。何で今日に限って

こんなことになったんだよ」

文句を言いながら皿を片付ける。

店内の隅で電話をする佐久間。

佐久間「今回の取引は失敗しました。はい、はい。そうですね、今後このレストランでの取引は辞めます」

電話を切る。

○レストラン外（夜）

疲れ切った顔でゆっくり歩く斉藤と志穂。  
穂。

志穂「さっきは、ありがとう」

斉藤「えっ！あー何か、自分でも良く分からなかった。頭の中が真っ白で…」

立ち止まる斉藤。

斉藤「やっぱり大事なことから：明日になる前に言いたい」

○レストラン外（夜）

レストランを出る奈緒子。

恵美「本田奈緒子さん」

驚いて振り返る、奈緒子。

奈緒子「：私の名前」

恵美「あの睡眠薬、すごい即効性ね。役に立ったわ」

奈緒子「えっ！」

恵美「それに、これ」

恵美、手に持っている遺書を奈緒子に見せる。

恵美「ゴミ箱に捨ててあったって事は、もう知らないって事でいいの？」

奈緒子、驚いた顔で何も言わず奪いとろうとする。

恵美、なかなか離そうとしないので半分に破れてしまう。

奈緒子「これは…」

言葉に詰まる奈緒子。

奈緒子「あ、あの人が飲んだ水…睡眠薬入れたのあなたですか？無茶苦茶です。使い方間違ってますよ」

恵美「それ飲んで死のうとするのは正しい使い方なの？」

奈緒子「…」

恵美「あーあ、でも本当生きてても良い事ないわよね、夫に浮気はされるし、仕返しは中途半に終わるし、離婚でもしようかな」

奈緒子「…あの人、ご主人だったんですね」

恵美「よくもまあ、良い事ない日が続くわよね」

奈緒子「…そうですね」

奈緒子、力なく笑う。

恵美「……」

奈緒子「……」

恵美「…何て言っただけか分からないし、あなたの気持ちはわからない。でも、あなたが今日ここにいてくれて良かった」

奈緒子「みんなを助けたのは、あなたです」

恵美「……やめた。死ぬなって言おうとしたけど。死んだらダメって言われて死なないなら苦労しないか。きっと私も離婚するなって人から言われても、どうするかはきっと自分で決める」

奈緒子「…」

恵美「でも、相手を間違えたっただけで、結婚した事自体を後悔してるわけじゃないし」

恵美、奈緒子とは違う方向を見つめる。  
つられて奈緒子も見る。

その先には、志穂に指輪をはめる斉藤。

恵美「じゃあ、また」

奈緒子「また？」

恵美「また。またどこかで会うかもしれない  
でしょ」

奈緒子「：そうです：ね」

帰っていく奈緒子。

それを見つめる恵美。

美波「あの、すみません」

と、今度は恵美が呼び止められる。

美波に向き合う恵美。

美波「ありがとうございます」

恵美「いや、気にしないで。たまたま上手く  
いっただけだから。自分でもびっくり、本  
当死ぬかと思った」

美波「私たちもです」

恵美「みんな待ってるよ。早く行ってあげれ  
ば。友達？」

美波「いえ…仲間です」

恵美「そう…」

3人を見つめる恵美。

恵美「今日がどんなにツイてない日でも、何でもない1日でも、会いたい人に、明日また会えるって良いよね」

美波「…そうですね。じゃあこれで」

恵美「じゃあ、さようなら」

美波、3人のところへ足早に行く。

クマのぬいぐるみを抱えている祥子。

後藤「何話してたの？」

美波「お礼に決まってるでしょ。お礼」

祥子「私、警察の取り調べ受けたの初めて。

あれって結局なんだったの？」

後藤「取引がどうのこうのって言ってたけど」

小田「もうさ、疲れたから何も考えずにさ、

このまま帰って寝よう」

後藤「俺初めて本物の拳銃撃ったよ」

美波「今度の役に生かせそう？」

後藤「いや、小道具の銃でも持つの怖くなり

「そうだよ」

祥子「もう、サプライズとかななくていいよ、

怖いから：もしかして、今までのこの一連

が全部がサプライズとかじゃないよね」

後藤「そんなわけないでしょ、どんだけ無茶

苦茶なんだよ」

祥子「そうだよね」

美波「じゃあ、私こっちだから」

立ち止まり、3人の顔を見る美波。

祥子「気をつけて」

美波「じゃあ、また：また明日」

笑顔の美波。